

「歴史とは、過去、現在、未来の対話である」。イギリスの著名な歴史家、E・H・カーの主張であり、歴史をなぜ学ぶのか、歴史研究にどんな意義があるのかを的確に示す「名言」であろう。本書は、イギリス帝国をグローバルな世界史の中に位置づけて、その果たしてきた歴史的な意味と将来の世界像を考えようとする試みである。そうはいっても、まずは筆者にとって身近な例から、語りを始めてみたい。

二〇二三年五月に広島で開催された先進国首脳会議（G7サミット）では、主要国の首脳に加えて、ウクライナ戦争の反撃で奮闘するゼレンスキー大統領、さらに「グローバル・サウス」の指導者が一堂に会して、国際平和と新たな世界秩序の構築について語り合ったことが話題になった。サミットには、イギリス首相のスナクも参加したが、広島の名物・お好み焼（広島焼）の実演と、広島カープの赤い靴下を履いて親密さをアピールしたパフォーマンスを除くと、マスコミでもほとんど取り上げられなかった。その事実が、現代世界におけるイギリスの存在感の薄さを象徴している。だが、直後の七月には、イギリスのTPP11（環太平洋経済連

携協定)への加盟が承認された。なぜヨーロッパの一国のイギリスが、あえてTPP11への加盟を目指したのか。香港返還後のイギリスは、果たしてアジア太平洋国家なのか? こうした疑問に応えるには、ブレグジット後に「グローバル・ブリテン」を掲げて新たな国家アンデンティティを模索する、現代のイギリスが置かれた状況を、歴史的に考察する必要がある。ブレグジット後のイギリスにとって、日本は理想的な同盟国であり、二十世紀前半の「日英同盟」の再現ではないかといわれるくらい、日英関係は良好である。

他方、スナク首相の目はインドにも向けられている。人口が一四億人を超えた現代のインドは、経済も年率八〜一〇%の高成長を続け、二〇二三年度にはG20の議長国を務め、モディ首相は「グローバル・サウス」の代表的指導者として、南側の開発途上国の利害を代弁し、新たな国際政治経済秩序の構築を主張している。二〇二三年九月にニューデリーで開催されたG20サミットには、イギリスのスナク首相もかけつけ、インド系出身の首相として、モディ首相と親密に語り合う姿が印象的であった。イギリスは、インドとの自由貿易協定(FTA)の締結を模索し、ブレグジット後の輸出不振を補おうと努めている。かつての英印関係が逆転して、イギリスがコモンウェルスの有力国でもあるインドにすり寄り寄る姿勢は、過去三百年以上にわたった帝国植民地関係を抜きにしては考えられない。また、イギリス政府が重視する「インド太平洋(Indo-Pacific)」戦略も、未来志向の歴史学の在り方と関係してくる。

本書は、こうした二十一世紀における新たな世界経済、国際政治秩序の再編と変容を理解するために、五百年に近い長期にわたる歴史的な時間軸と、アジア太平洋・インド太平洋世界の出現につながる地理的・空間的広がり両面から、イギリス帝国の盛衰を中心に置きながら、新たな世界史であるグローバルヒストリーを考える試みである。最後まで、お付き合いいただいたければ幸いである。